

歴史コーナー常設展示 ―古文書をよむ―

古文書が語る加藤正方 ①

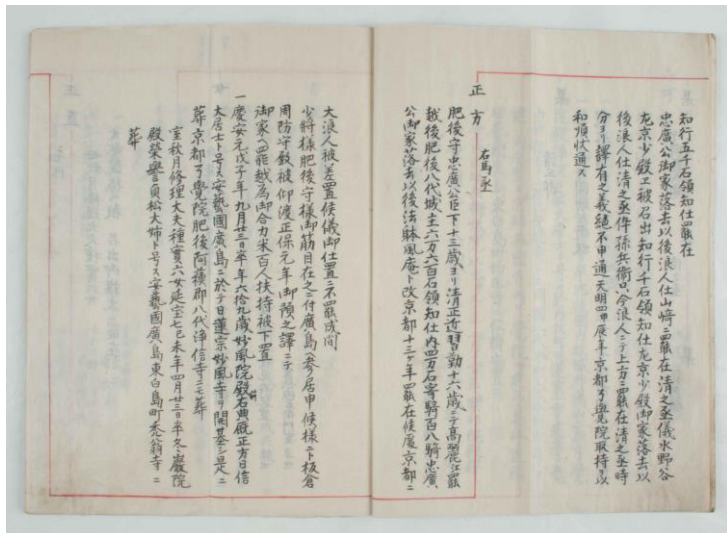
江戸時代のはじめ、加藤清正・忠広の家老および八代城主として活躍した加藤正方。この展示では、加藤正方の子孫の家に伝来した古文書を中心に、波乱万丈な加藤正方の人生をご紹介します。八代城下町を拓いた男の実像やいかに。

八代城主・加藤正方の子孫の系図

1 広島加藤家系図 ※原書名 加藤精造系図伝記

時代 明治時代（19-20世紀） 所蔵 当館蔵（広島加藤家資料）

江戸時代初めの20年間、八代城主を務めた加藤正方の子孫の家に伝わった系図です。正方は加藤清正の重臣・片岡可重（よししげ）の次男。父とともに「加藤」姓の名乗りを許され、清正亡き後は筆頭家老として肥後を支え、また八代では城と城下町を造り、現在の中心市街地の基礎をひらいた重要人物です。



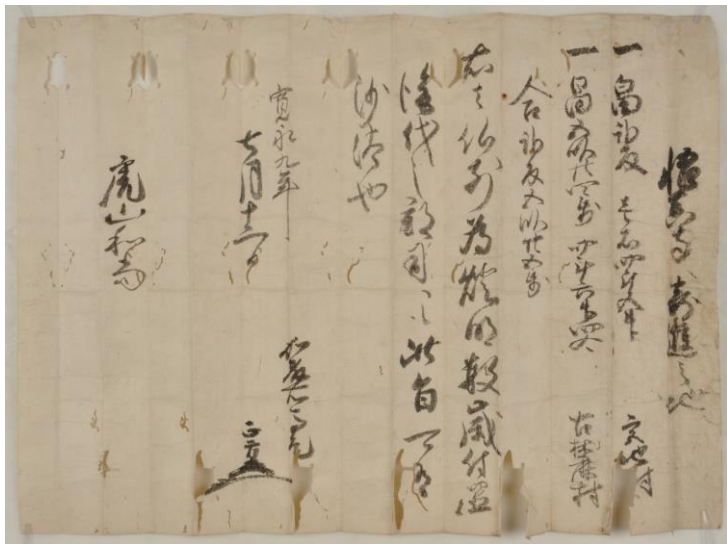
「正方」の自筆サインがはっきりと！

2 加藤正方寺領寄進状

時代 寛永9年（1632） 所蔵 悟真寺（当館寄託）

正方が八代の悟真寺の虎山和尚に宛てた寺領寄進状です。従来寄進していた宮地村・古麓村の寺領を、引き続き「後代之郡司（次の領主）」にも認めてもらうための保証書というべき内容です。

寛永九年（1632）肥後加藤家が改易（大名お取りつぶし）となり、正方も八代から離れることとなります。この寄進状はその事後処理作業の中で発行されたもので、署名の下に自筆のサイン（花押）がしっかりと残っています。

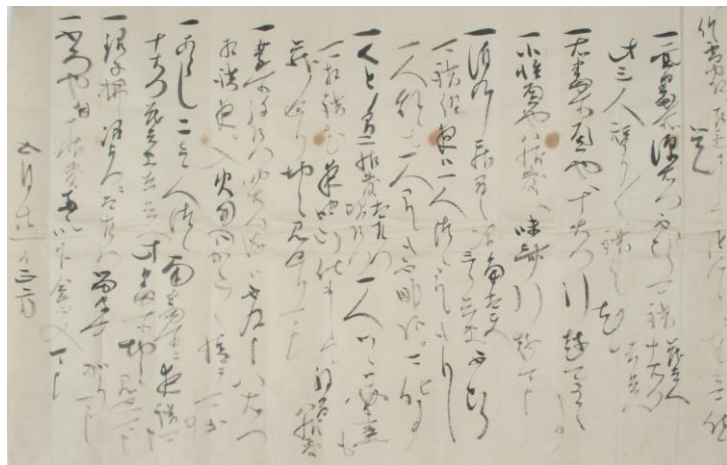


小姓たちの配置を細かく指示

3 加藤正方自筆覚書

時代 江戸時代前期（17世紀） 所蔵 当館蔵（広島加藤家資料）

正方が自分で書いた指示書です。この中で正方は、屋敷の中での小姓たちの配置や当番体制について、「三人交替で詰めなさい」「台所は火に用心なさい」などと細かい指示を出しています。おそらく自分が屋敷を留守にする時のためのものと思われます。この覚書が書かれた時期は不明ですが、「抜け目がない」正方の性格がよく表れた覚書といえるでしょう。

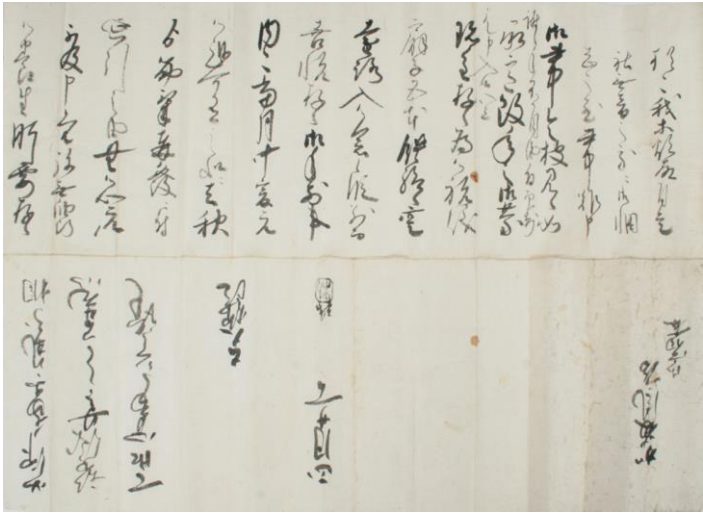


牢人となっても幕府大老と交流

4 土井利勝書状

時代 江戸時代前期 (17 世紀) 所蔵 当館蔵 (広島加藤家資料)

大老土井利勝が牢人中の正方に宛てた書状です。この中で、利勝は「江戸にお越しの予定だったのに、ご病気とのことで会えず残念です」と述べており、この2人に面会予定があったことがわかります。このように、正方は「牢人」という身でありながら、幕府の要人と積極的に交流していたのです。正方は、肥後時代に培った政治力と人脈を使い、したたかに再就職を図っていたようです。

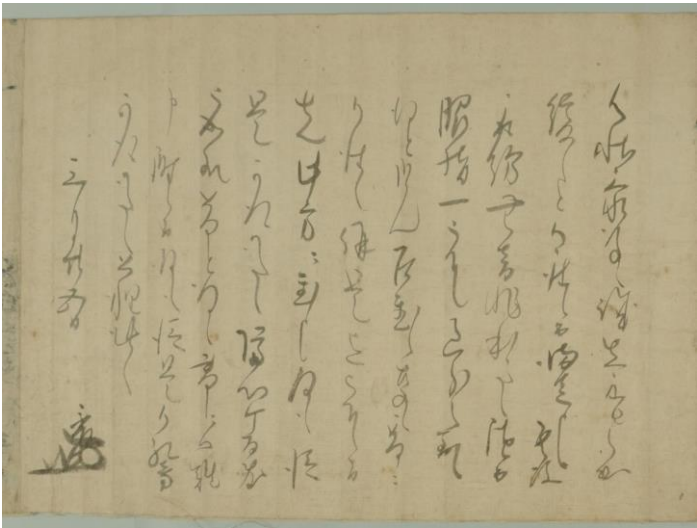


あの超有名な剣豪とも交流

5 柳生宗矩書状

時代 江戸時代前期 (17 世紀) 所蔵 当館蔵 (広島加藤家資料)

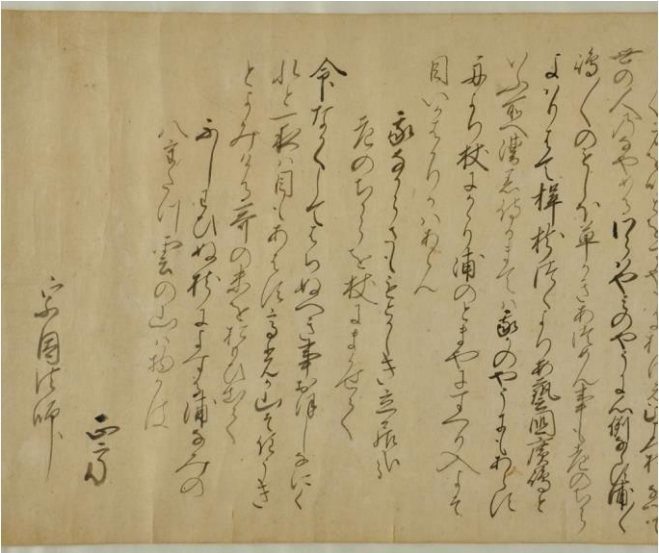
江戸時代初期に徳川秀忠の剣術指南役として活躍した剣豪・柳生宗矩が京都で牢人忠の正方に宛てた手紙です。この中で宗矩は、正方が面会に来たこと、その際に正方が宗矩に贈った「脇指 (刀)」について、御礼を述べています。宗矩は大和一万石の大名であると同時に、幕府惣目付という役職も務めていました。正方が幕府要人と交流していた様子がここからもよくわかります。



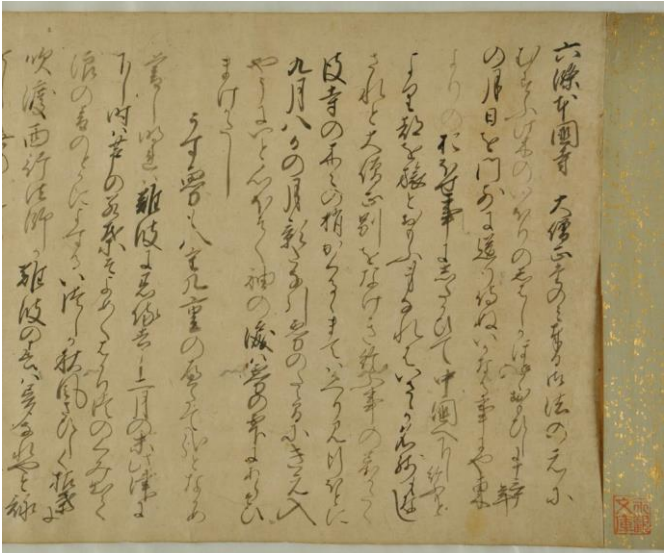
京都を追放され広島へ

6 加藤正方広島下向記 時代 正保元年(1644) 所蔵 当館蔵

正保元年(1644)8月、幕府は有力牢人の京都追放を命じ、幕府要人との交流を咎められた正方は広島の大名・浅野家にお預けとなります。これは正方が同年9月に京都を離れ、大坂から船に乗って広島に向かう際の紀行文で、それまで正方の側近く仕えていた旧臣・西山宗因からもらった「送別の和歌」に応える形となっています。近年発見された資料で、正方の動向を知る上でとても貴重です。



巻末



巻頭